

61. Brown-Séquard 症候群を呈し、診断に plain CT が有用であった外傷性脊髄くも膜下血腫の 1 例

森 宏・寺林 征 (富山県立中央病院)
北沢 智二・杉山 義昭 (脳神経外科)

何ら基礎疾患を有さない外傷性脊髄くも膜下血腫の稀な 1 例を経験したので報告する。

症例は 43 才男性。自転車で走行中誤って転倒し右前額部を強打した。頸部痛、頸部運動制限を訴え近医に入院したが、受傷後 2 日目より左不全片麻痺及び左上肢シビレ感が出現した為、受傷後 4 日目当科へ転入院となった。入院時意識清明で、頭蓋単純写及び頸椎 2 方向写にて異常所見を認めず、頭部 CT にても異常所見を認めなかったが、左 C₂₋₃ 領域の Brown-Séquard 症候群を呈するようになった為、上位頸椎 plain CT を施行した所、C₁ 椎体レベルから C₂₋₃ 椎間レベルに達する左側脊椎管内に高吸収域を認め、手術にて同部位くも膜下腔に血腫の存在を確認した。AVM 等の血管奇形は認めず、出血性素因等の基礎疾患も認めなかった。徐々に進行する脊髄圧迫所見及び頸部痛、頸部運動制限が特徴的所見と考えられ、診断には plain CT が安全かつ有用な補助診断法と思われる。

62. 釘による頭蓋骨・脳刺入損傷の 1 例

佐々木 尚・中村 勉 (金沢医科大学)
江守 巧・郭 隆彦 (脳神経外科)
角家 暁

自動釘打ち機に接触し、釘が頭蓋骨を貫通し、脳内に刺入した 1 例を経験したので報告する。症例は 49 才男性。作業中誤って自動釘打ち機に接触し長さ 45mm の釘が蓋頭骨を貫通した。意識消失はなく独歩にて来院した。来院時意識は清明で神経症状は認めなかった。釘は左耳介上部後方より刺入していた。出血は軽度で CSF の漏出はなかった。単純写で釘は左側頭骨後縁を貫通し、錐体後縁に平行に刺入していた。CT スキャンでは釘は天幕を貫き左小脳半球外側縁に達していた。直ちに全麻下に釘を中心とした皮膚に直切開を加え、釘の刺入した部分は骨弁として残し後頭下開頭を行った。骨弁に釘をつけたまま静かに引き抜いた。釘は横静脈洞 1cm 上より硬膜を貫き、後頭葉にささっており、わずかな出血と挫傷を認めた。術後一過性に髄液内細胞増多を認めしたが、何ら神経脱落症状なく 1 ヶ月後に退院した。術後 12 ヶ月の現在、感染の徴候はなく元気に社会復帰している。

63. 外傷性気脳症 46 例の検討

宗本 滋・石黒 修三 (石川県立中央病院)
木村 明・池田 正人 (脳神経外科)
正印 克夫

外傷性気脳症 46 例について検討した。年齢は 2 才から 82 才までで、平均 37.8 才であった。受傷原因は交通事故 28 例、転落事故 10 例、その他 8 例であった。頭蓋内空気存在部位より ① 脳幹周囲に空気のみられたもの (脳幹型)、② 脳幹周囲以外に空気のみられたもの (直接型) の 2 群に分けて検討した。

1) 気脳症 46 例中、脳幹型 23 例 (50%)、直接型 23 例 (50%) であった。2) 死亡群は 16 例で、脳幹型 13 例 (81%)、直接型 3 例 (19%) であり、脳幹型が多かった。3) 生存群は 30 例で、脳幹型 10 例 (33%)、直接型 20 例 (67%) であり、直接型が多かった。4) 生存群の脳幹型 2 例に髄膜炎がみられ、経過不良であった。5) 死亡率についてみると、脳幹型では 23 例中 13 例 (57%) であり、直接型では 23 例中 3 例 (13%) であった。

脳幹型では強い外力により、頭蓋底骨折をきたすと同時に、直接型に比し、頭蓋内損傷の程度も強く、死亡例が多かったものと考えられた。

64. 頭部外傷による末梢性動眼神経麻痺

須賀 俊博・園部 真 (国立水戸病院)
桑山 直也・甲州 啓二 (脳神経外科)
高橋慎一郎

今回我々は、外傷性動眼神経麻痺患者 9 例について、予後などを検討したので報告する。対象は、昭和 53 年から昭和 60 年 5 月迄の約 7 年間の頭部外傷入院患者 502 名のうち眼瞼下垂、外眼筋麻痺、内眼筋麻痺のうち 2 つ以上を示した 9 例である。脳ヘルニアや眼窩内損傷、いわゆる traumatic mydriasis は除外した。年齢は 6 歳から 67 歳までで、男女比は 4 対 5、受傷機転は、交通事故 6 例、転落 1 例、転倒 1 例、作業中の事故 1 例であった。頭部外傷の程度は、荒木の分類で I 型 2 例、II 型 4 例、III 型 3 例で、従来の報告に比べて、外傷の程度は強いようである。眼窩部打撲 3 例、うち骨折のあるもの 2 例、眼窩部以外の前頭部や側頭部を打撲したもの 4 例で、うち骨折のあるもの 3 例、後頭部に骨折のあるもの 1 例であった。予後に関してみると、約 1 日で回復したもの 2 例、約 1 から 2 ヶ月で治癒したもの 2 例、数ヶ月のうち軽快はするものの治癒しないもの 5 例であった。